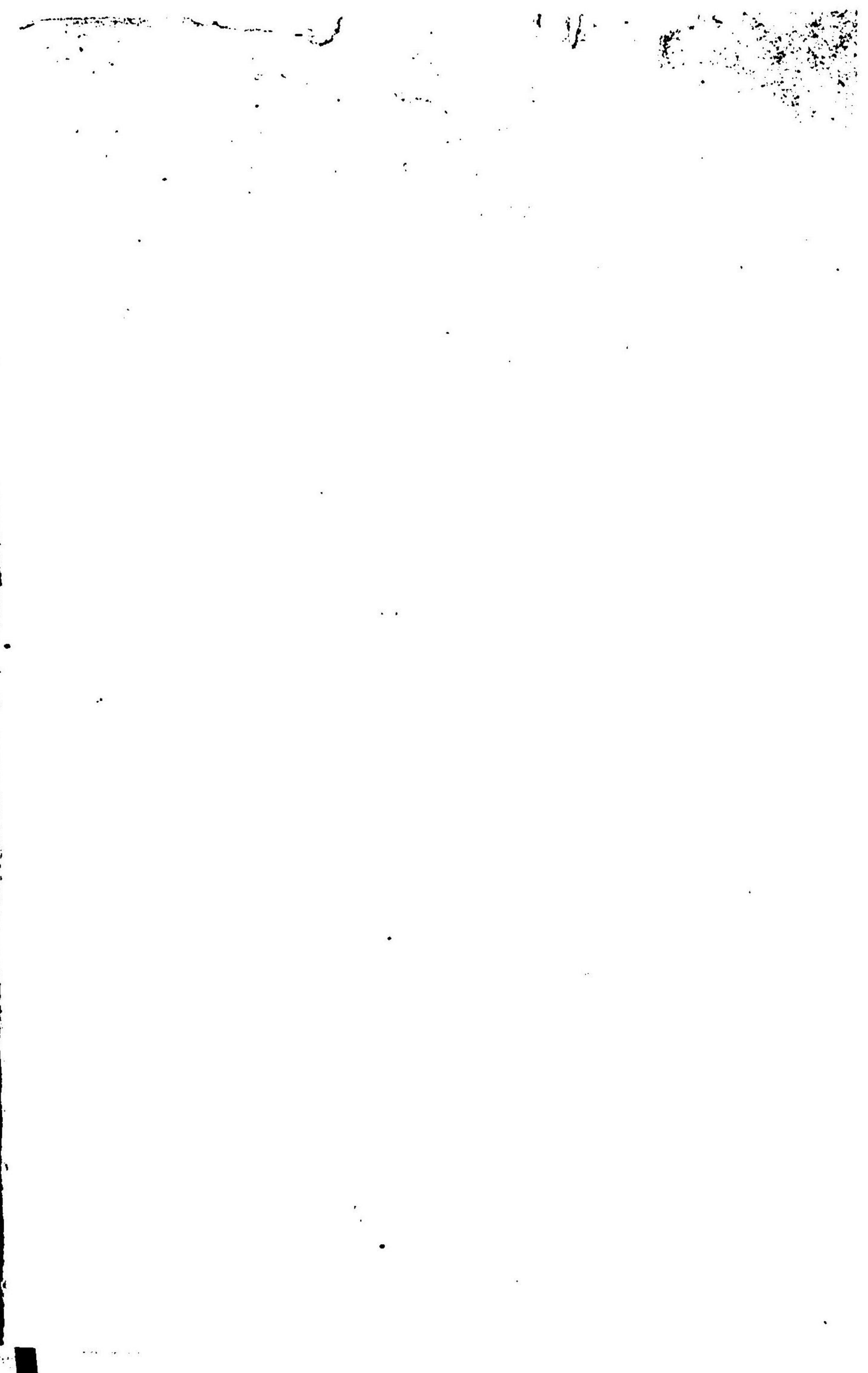
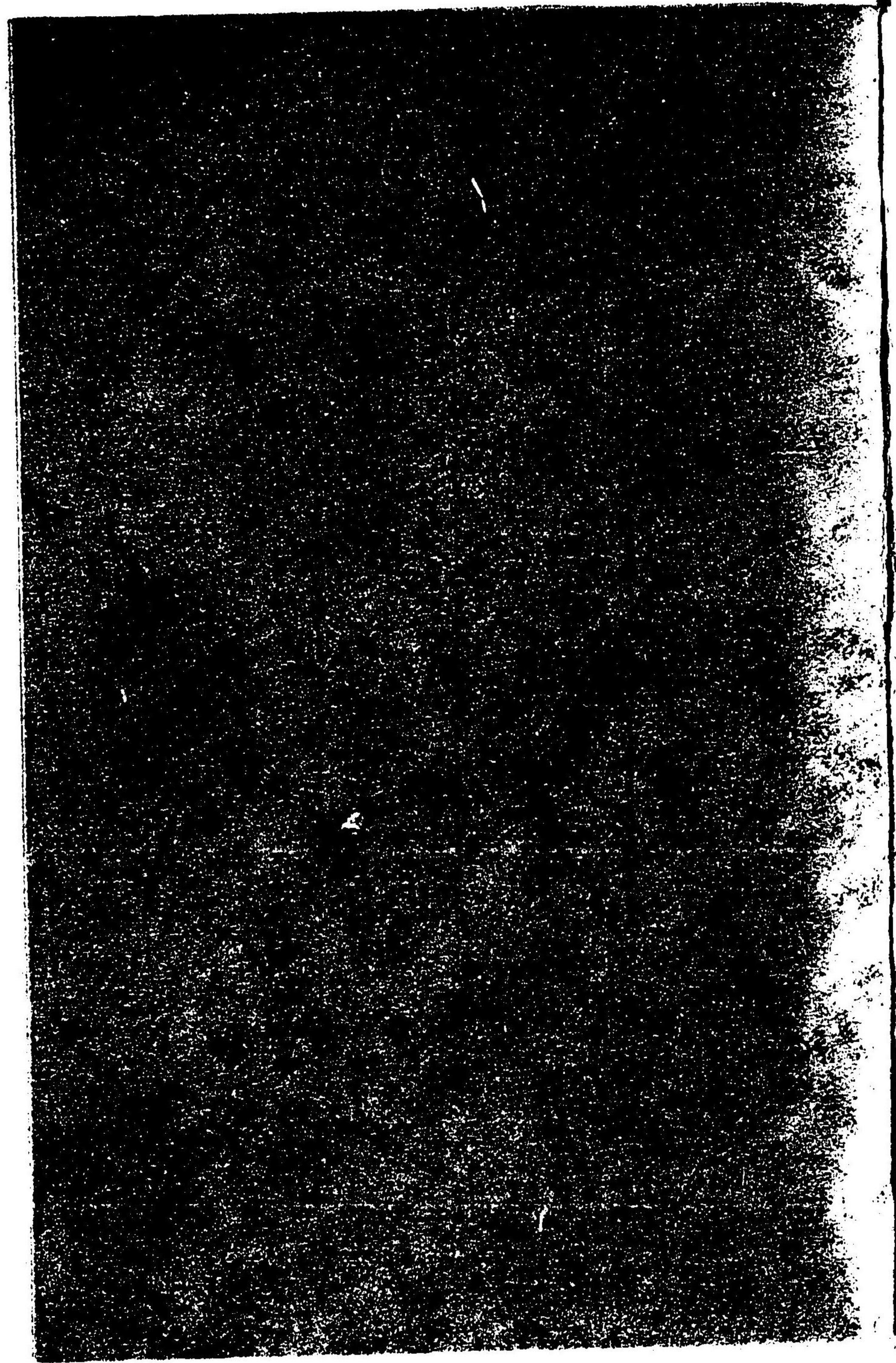


康有為

本會久香君蓋





61

51

日本叢書第四冊

富田雙川、小原祝南兩君著
嗚呼江藤新平

日本叢書
第五冊

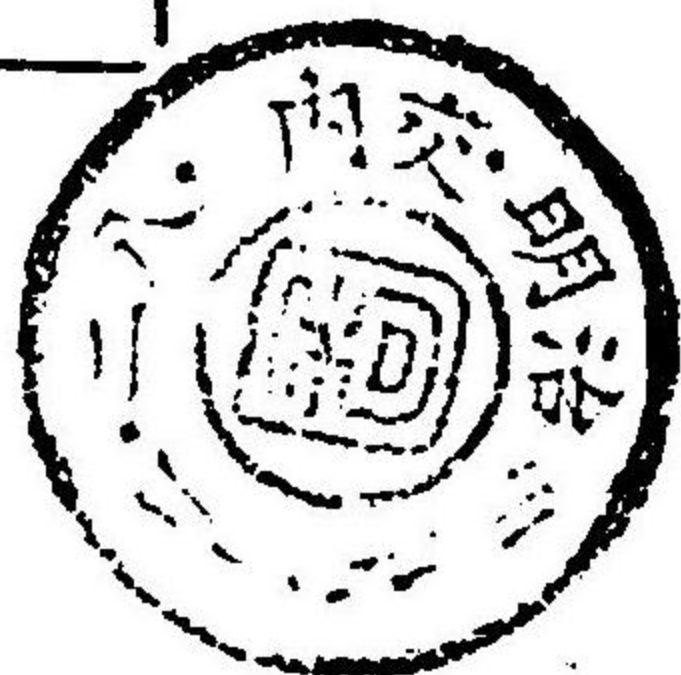
本多天耕君著

傳

燈

錄

近刊



近刊

上已後四日與東洲兄遊晚香坡園泊觀櫻花思東國舊

遊並送東洲兄還國偏示東國故人正櫻花大放時也

大瀛萬里隔遊塵

上野櫻花照暮春

未敢回頭思漢月

得歸江戶是鄉題

東洲兄還國再賦一章亦足知遊者之情也

櫻花開罷我來時

我正去時花滿枝

半歲看花住三島

盈々春色最相思

康有為作

日本叢書 第三冊 康有為氏

四月下旬北米沙亞市に於て

坂本喜久吉

(一)

成敗に由りて事を軒輊するは斷して不可也奈翁は絶海の孤島に幽囚の身となりしも彼か絶代の英雄たるに於て何かあらん秋風骨を埋む薩南の巨人尙且つ一世の豪傑たるを思へば中華戊戌之政變に圖らざるも身は國家の大罪人となり流離困頓五尺の軀幹容るゝに所なき清國革命派の領袖康有為氏其人の如き蓋しまた其一人ならん歟彼れは支那近代に學者たり名士たり政治家たり學者としては則ち經世之實務に通じ名士としては愛國の氣概に富み政治家としては最も大膽不敵の手腕を有す

故に隣邦累卵の今日に際り實に必要缺くべからざる人物たる也然るに
かなしひ哉先に胸中の事業蹉跌して幾度か死地に陥りしも皇天未だ彼
を捨てざわづかに難を遁れて帝都に來り爾來大隈伯等の顧遇に依りつ
ありしが今や我對清外交上の局面はたのむ樹かげに雨もれて再び異
郷の客となり干茲本年三月廿二日横濱港解纜の和泉丸に搭じて世界漫
遊の途に上りしはるも幸乎不幸歟吾人は之を彼か捲土重來の日に徴し
今日の外遊は寧ろ其幸なるを信するもの也然れども又國歩困難の今日
に當り非凡彼の如きを遠く外に放つは獨り彼のみならず我の爲めにも
亦其不幸なるを見せんをあらす遮莫支那の前途は果して如何分割に亡
ん乎革命に終らん乎此れ目下の疑問也問題也彼幸にして志を得れば改
革行はれ主權完かるべきも若し不幸にして否らせんは其波蘭となり安
南たらんは未だ容易に知るべからざる也東海と踏で亡國の臣たらん乎

隴畝を出で輔弼の臣たらん歟彼の前途豈に注目の價値なからずや於是
乎彼一個人の問題は乃ち清國死活の問題たる也彼の任亦重しと云ふべ
し
今や彼は七生の恨を載せて北溟の濤を蹴りつゝあり想ふに雄志空しく
燕京に馳するの身は亡命の客となつて台灣海峡を渡り難し半宵夢は奥
城に落つるも山河隔たりて身の洋中にあると如何せむ
遙に北関を望んで聖躬を拜すれば痛詔今なほ耳にあつて丈夫鐵石の腸
を斷つ幾何ぞ吁渠如今の境遇は天下志士の熱涙を値するに足るものな
しとせんや吾人船に在て彼と卓を全する事殆んど三週日其間或は筆談
に依り或は通譯（中西重太郎氏並に清人從僕一名隨行す）により多少
政變の由來を聞知して轉た感慨に堪へざるものあり故に今聊清議報並
に彼の語る所を參照して當時の顛末を略叙し併て彼が性行の一斑を評

論せんと欲す

(二)

曾國藩、文祥、李鴻章、張之洞の如きは支那近來の名士として夙に世人の知る所也而り彼等は其爵祿の上よりするも門閥の上よりするもはたまた名望地位の上よりするも優に國家の元老として國難の衝にあたるべきは固より論なき耳然るに曾文は己に逝て李張亦老ぬ加ふるに三百年來の積弊は病膏盲に入りて今や内憂外患交々到り朝に一州を割き夕に一省を失ふも如何ともなま能はざる也國威日に失墜して國境月に縮るも一人の起て之が挽回の策を講ずるものなき豈に悲しからずや故に其國勢岌々乎として如今分割論の稱導さへ見るに至りしは寧ろ至當の事而已何ぞ深く怪むに足らんや此時に方り卑拔非凡の一丈夫あり赤手と奮て國家の重きに任じ一死以て社稷の難に殉せんとせしは實に康

有爲氏其人にあらずや

彼は元嶺南儒家の一布衣也然りと云へども其學は古今に涉りて識見高く十一年前科擧に及第して進士となれり叨りに秩祿を求めて仕ふるを欲せき専ら心を實學に注ぎて普く子弟を教育し其數己に千餘人の多きに及べりと云ふ故に方今清國の志士にして切齒扼腕奮て國事に當らんとするものは多くは彼か薰陶の下に出ざるはなし就中梁啓超、徐勳等の輩は康門の秀才にして其名夙に顯る前者は這回の政變に因て彼と共に難を東京に避け後者は横濱にあつて今尙大同學教の校論たり（元校長たりし犬養氏と更代と）而して彼の弟康廣仁亦勤王の志厚く能く彼を救けて四方に奔走せしが哀むべし六烈士の一人として先きの政變に斃れたり

彼は一昨年天下の形勢日非なるを視、慷慨の念轉た禁ざる能はざ身と

以て國に殉せんと欲し大に同志を集みて先ず北京及び上海に政社を興し互に氣脈を通じて痛く上下の惰眠を警醒せり當時北京に保國會あり廣西に聖學會あり上海に經濟會あり湖南に南學會あり廣東に勉學會あり何れも皆天下知名の士を網羅して正論公議最も時事に憤慨す其狀恰も我維新開國の時に似たりと云ふべし就中彼が北京演說會の席上に於て懸河の雄辯滔々と老子の像に鞭て其道教と説破せしが如き實に支那未聞の事にして是より彼の名聲専ら中州に喧傳す加之彼は五たび出で五たび闕下に伏し東西の事例を引きて涙にむせびつゝ變法改革の已むべからざる所以を述べ以てひとへに其聖斷と待つ彼か云へりし末節に

陛下願くは露國ペートル大帝の心を以て心となし日本明治の法を以て法となせ又曰く社稷存亡の機は今日にあり陛下の發憤すると否とは此時にあり臣狂言に依り罪と獲るも敢て辭する所にあらざる也

最後に沼吳の禍裂普の患を引て縷々數十言國家の滅亡する所以を極諫を其言悲壯沈痛覺へず人をして感慨に堪へざらしむげに衆人の諾々は一士の諤々に如かざる也果然皇帝は之れが爲め心大に動き終に四月廿七日勅詔と下して彼を召見せり無位無官艸莽の一匹夫にして拜謁を待る他國に在ては未だ必ずしも稀しとなさざる也然れども支那の如き繁文褥禮階級を重する舊邦に在て此事あるは眞に破天荒のことなりと云ふべし如此して彼は畏くも龍顏に咫尺して天眷優渥光榮身にあまりて感泣措く所を知らず是れ彼が深く主上の知遇に感激し衆目痴視の間に立て頑冥不靈の大臣を拮抗し斃而後止まんとせし所以也駿馬あるも伯樂なくんは千里の健脚用ゆるに由なりむ彼は今身一代の聖主に遇ふて獨力回天の事業に任せんとす其得意想ふべき也伊太利の建國は傑士「カブール」の手腕に因て成れり「エスマニエル」に劣らざる

○も英邁果斷の光緒帝は彼を得て漸く時局を濟せんとす帝の負托知るべ
 ○き也於是乎忽ち維新の勅詔となり改革の上諭となり新詔頻りに下りて
 ○多年の革新望むべかりしも如何せむ大厦の覆らんとする豈に能く一本
 ○の支ふる所ならんや恨むらくは事志と違ひ至尊幽廢せられて其の身も
 ○亦亡命の臣となりしに實に長大息に堪へざるなり然れども一死國に殉
 ○せんせし彼が滿腔の熱血は革命の警鐘となつて清國滿天下の士氣を
 ○鼓舞したるや今更云ふ迄もなし況や六名の烈士は從容として己に刑戮
 ○に就ち維新歴史の第一ページを染めたるるや嗚呼渠等の死慘は則ち慘
 ○なりと云へども而かも其至誠は天地を貫て壯烈鬼神を泣かしむべし渠
 ○等亦以て瞑すべき也

(三)

抑も彼の失敗が變法に伴ふ兵權の皆無なるに由るは勿論なりと云へど

も而も之を以て直に彼を無謀也急激也となとは甚だ酷なりと云はざる
 を得ず何となれを改革の第一要義は舊弊を刷新し併て政權と收攬する
 にあれば也己に政權なし是れ改革に於ける難中の難なり故に當時の形
 勢に於て彼が取りし手段は決して無謀なりと云ふを得たといひ曾國藩
 李鴻章の徒をして之に當らしむるも此の策以外に一の良案あるを觀さ
 れた也由來男子は善諾を尊ぶ況や事皇室に關するものをや當時皇帝言
 わり曰く

朕は亡國の君たる能はざる若し朕に權を假さずんば朕は寧ろ位を遜ん
 己而

以て其間の消息を窺ふべきに非らずや若し天れ政權の移推を待て事を
 發せん乎猶百年の河清を待つが如し況んや國辱千秋亡國恨乎彼豈之を
 知らざらんや知而猶且之を爲す彼の苦衷寧ろ諒すべき也北米獨立は目

由の二字に成り清の改革權のは一字に敗れたり其狀同じからと云へども其義は則ち一たり之を思はずして妄に彼を非議するは愚亦甚しと云ふべし且夫れ清帝にして庸君暗主ならんにはいさ知らせ彼にして急激短慮ならんには則止む苟も然らず君臣相和するの深き此の如く而して尙且輔弼の任と全ふする能はせへゲールの英雄は英雄たるも時勢に勝たずとは蓋し彼の謂乎故に彼を精評せんと欲せば宜しく其際に於ける彼の境遇を知らざるべからせ彼の境遇を知て而して始めて彼の苦衷を察すべく彼の苦衷を察して而して始めて其無謀輕舉にあらざることを知り得べし其所謂其境遇とは如何曰く當時西后及び榮祿等の兇暴は殆ど其極に達せしも奈何にせむ皇帝は身に寸柄なく徒に虚器を要するに過ぎざりし也故に形勢日に益々非にして禍亂の爆發目前にあらんとするや彼弟と諫めて曰く

古より主權不一の國にして能く大事をなすものなし今皇上天竄叙聖なりと云へども賞罰の權なく全國の大柄に西后の手に在て萬人の猜忌此の如し守舊大臣の痴愚此の如し何ぞ能くなすあるを得ん阿兄何を速かに北京を出でさる彼答へて曰く孔子の聖、知其不可而爲之、凡人見儒子將入于井、猶思援之、况全國之命乎、况君父之難乎、西后の專横舊黨の頑固皇上之を知らざるに非らせ然るに猶且つ位と舍て身を忘る天下を救はんとす我忝くも皇上の知遇を受く義に於て固より身を引くべからざる也弟復曰く阿兄身を捨て之を救はんとするも而かも事に必き益なく徒に一死あらん耳死固より惜むに足らせと云へども他日の事業正に多し阿兄責を重せば今は尙死すべき時に非らざる也彼辭に答へて曰く死生自ら天命あり吾十五年前奥城に在て築屋の下を通行す偶々飛磚墜落して面を打ち出血すること夥し此時

若し飛磚斜に落つる事半寸ならん乎我の死するや久し天下の境遇亦斯の如き類而已今日の事險は乃ち險なりと云へども我は之を觀るに飛磚を以てせむ且吾心の安する所を行ふ他事は我の計る所に非らざる也

何○其○言○の○烈○烈○なる○や○丈○夫○國○に○許○す○須○ら○く○當○に○此○の○如○く○なる○べし○危○
を○見○て○進○ま○ず○難○を○見○て○退○く○は○男○子○の○恥○る○所○也○事○成○れ○ば○時○局○を○救○ひ○事○成○
ら○さ○れ○を○一○死○以○て○君○恩○に○酬○せ○ん○而○己○彼○何○に○す○れ○身○を○思○ふ○の○違○あ○ら○ん
や○此○の○如○き○決○心○此○の○如○き○抱○負○を○以○て○事○實○上○彼○は○無○冠○の○大○宰○相○と○な○り○譚
林○以○下○の○烈○士○を○操○縱○し○て○積○弊○を○打○破○す○る○と○疾○風○の○枯○葉○を○拂○ふ○が○如○く○其
熱○殆○ん○ど○當○る○べ○か○ら○せ○夫○の○八○股○取○士○の○制○を○廢○し○て○更○に○内○政○外○交○工○學○理
財○學○兵○等○の○特○科○を○設○け○人○材○登○用○の○道○を○開○け○る○が○如○き○奈○何○に○天○下○の○視○聽
を○驚○か○せ○し○や

全○國○に○大○中○小○の○學○校○を○設○け○教○育○を○普○及○し○て○人○智○開○發○の○基○礎○を○定○め○た○る
が○如○き○奈○何○に○嬖○官○汚○吏○の○肝○膽○を○寒○む○か○ら○し○め○し○官○報○局○を○設○け○農○工○商
總○局○を○置○き○殖○産○興○業○の○發○達○を○圖○り○し○が○如○き○奈○何○に○時○勢○の○必○要○に○應○せ
し○や○其○他○淫○祠○を○收○め○て○學○校○と○な○し○宮○中○に○法○制○局○を○設○け○て○我○維○新○の○政○に
倣○ん○ど○せ○し○が○如○き○或○は○文○武○の○官○吏○と○日○本○に○派○出○せ○ん○と○し○た○る○が○如○き○或
は○衣○服○を○改○め○ん○ど○せ○し○が○如○き○或○は○拜○跪○の○禮○と○廢○せ○ん○と○し○た○る○が○如○き○或
は○皇○帝○を○し○て○各○國○に○巡○遊○を○な○さ○し○め○ん○ど○せ○し○が○如○き○或○は○滿○漢○の○境○界○と
排○除○せ○ん○ど○せ○し○が○如○き○何○れ○も○咸○清○國○刻○下○の○窮○所○に○適○中○せ○さ○る○は○な○し○然
る○に○悲○し○む○べ○き○哉○西○后○の○垂○簾○に○及○ん○で○是○等○の○新○政○は○悉○く○廢○滅○に○販○し○一
た○び○文○明○の○光○に○浴○せ○ん○と○せ○し○清○國○も○再○び○暗○黒○の○舊○態○に○復○せ○し○は○實○に○言
語○同○斷○の○始○末○と○云○ふ○べし○由○來○化○鷄○農○を○告○ぐ○る○は○國○家○の○慶○事○に○非○ら○ざる
也○殷○鑑○遠○か○ら○せ○半○島○の○皇○妃○に○あ○る○を○知○ら○せ○や

(四)

古來英雄の數奇志士の轆轤最も憐むに堪へたり佛の「フランゼー」國は外に埃及の「パシヤ」は西蘭島に高麗の朴泳孝は今も尙其身を我に托す而して彼も亦包藏禍心潜圖不軌、前日竟有糾約乱黨謀國願和園劫制呈太后之事又聞該乱私立保國會言保中國不保大清其悖戾情形實堪髮指てふ罪名の下に首身所と異にせんとす嗚呼國に盡すの至誠は却て仇となり罪なくして配所の月を見る彼の心の裡如何ならむ況んや聖上の幽瘴おや況んや國家の存亡おや天翻地覆をも此恨忘るゝの期なかるべし

聞く政變の當時彼を捕へんとして北京府中の騒動大方ならず八方に非常線を張りて城門を鎖すと二度汽車を止むると三度加之尙は三千の兵を發して各所を搜索すると數日所謂天羅地網其嚴重なること實に驚くに堪へたり蓋し清國に在つて一匹夫を捕へんが爲あ此の如き大々的非常警戒と要せしは實に千古未曾有の事なりと云ふ且つ八名の刺客は己に海を渡りて我京濱に彼を追躡し尙は彼が首に五万金を懸賞したるが如く奈何に北京政府が彼を恐るゝかの一端は偶々以て彼が勢力の所在を知るに足るべき乎

吾人は彼に接するの前竊に想へらく禹域四百州の興亡に任せし彼康有爲氏必ずや威風凜々として容貌魁偉の好丈夫ならんと然に何ぞ圖らん其風格は清婉にして舉止亦端正絶て輕操急激の態を見せ其語るや諄々として士の禮あらんとは蓋し光明磊落威嚴人を壓する底の風采は彼に求むべからざるも憂國の至誠肺腑に徹する底の氣概は彼に於て多しとする所也「マコレー」の所謂質朴は英雄の本色末どの言は彼に於て見るを得べき歟世間稍もそれば獨り彼が身と全ふしたるを議するものあり然れども是れ全く其事實を解せざるの人也其本末と知らざるの徒也瓦

○となつて完からんより玉となつて碎けんは丈夫の本領也男子の面目な
 ○り志士の理想也況んや身聖主に遇ふて國難の衝に當る彼豈に死を怖れ
 ○て而して生と偷むものならんや政變の當時にありて彼は實に北京にあ
 ○らざりし也請ふ左に聊か其願末を述べむ

るも彼が北京を去りしは八月五日にして所謂政變なるものは其翌日を
 以て破裂せし也故に此事既に彼が冤を雪ぎてあまりありと云ふべし聞
 説らく先是彼は軍機大臣の奏請に依りて上海に出でんとせしが願れを
 奸臣内に跋扈して革新の事業とかく多難也加ふるに西後の殘忍に榮祿
 の陰險あり其阡陷せられざらんとをるも豈に夫れ得べけんや且窮かに
 天津觀兵式の時を以て皇帝廢立の陰謀あるを耳にとたとひ身を水火に
 投ざるも丈夫國に許すの本領は此時にあり安が京と去るに忍びんや是
 れ彼が強て出づるを肯せざりし所以也然るに七月廿九日突然として早

くも衣帶詔（按ざるに衣帶の詔とは漢の獻帝の時曹操と截せんとせし
 も彼の勢力侮るべからせして謀の洩れんことを恐れ帝劉備と召し窮か
 に帶を賜ふの風して密詔を下せり是れ即ち后世衣帶詔の起りし所以也
 ）は降りり中に朕位幾不保の語あり嗚呼何等悲痛のこと乎天に二の日
 なく民に二王なし聖齡今や三十、躬は一天萬乗の君にして四海の政柄
 をしらしめず大清の皇帝陛下也而してなほ且つ此言をなす宜べなり彼
 等が詔を捧げ相抱て歎歎流涕次々に血を以てせしや時は至れり機は迫
 れり變は測るべからせ而して右を望み左を視るも佞姦斗筲の輩堂に滿
 つ彼の憤懣想ふべき也如此して彼は髮豎ち毗裂け猛然として日夜王事
 に勤めしが二日忽ち明詔あつて其上海に往くと命す三日更に亦た密詔
 あつて其行を促すこと益々急也往かざらん乎密詔の重きを奈何せむ止
 まらざらん乎聖躬の安危元より知るべからず嗚呼一寸の心に前後を想

ふ彼が當時の境遇も亦可憐哉然れども退て熟ら考ふるに廢立の陰謀は來る九月觀兵式の時にあり販來直に救護の策を講ずる未だ必しも暹しどなさる也於是乎彼は意漸く決し四日參内してよろながら茲しはしの名殘を告げ奉り堅く後事を同志に托して翌昧爽北京を出發せり時に月落ち烏啼て滿眼の光景轉た慘愴首を回せき北京城己に隔たつて國を思ふの情倍切也げにや時を傷めば晚報ぐる鐘の音も最とあはれに聞おもめり世を憂ふれを心なき白河の流れも易水の憾みを添ゆるならむ遊士腸を斷つ漢城戊戌の暮身は君命を奉して遠く他に使す想ふに彼が當時の胸中は果して如何ならむ

(五)

白刃前に閃き秋水頭に臨むも此心この膽奪ふべからず去れど君命辭むに由なくして彼は鞏毅の下を辭せり神ならぬ身の誰か禍害の爆發其翌

日に到るを想はんや當時北京の政友は變を聞て彼の爲め消息を通ずるの道なく皆以て其必死を卜せり烈士譚詞同言あり曰く皇上己無從救、今先生亦無從救 我已無事可辨、惟有待死期而已、以て其一斑と窺ふに足るべしかくて彼は天津より汽車に乗じて塘沽にくだり直に招商局の汽船に乗込しが該船には上等室なく且つ出帆時刻も延期して明日午後の解纜となれり依て彼は再び上陸して此夜は塘沽に一泊し更に其翌日午前十時英國の汽船重慶號に轉乘して上海に向へり恰も此日事變の起りしを以て榮祿等は直に天津塘沽の騎兵に命じ彼を逮捕なさしめんとせしも彼既に去てまた奈何ともなす能はざる也依て一方には芝罘及上海に馳電すると同時に軍艦飛鷹をして彼を窮追なさしめぬ飛鷹は清の報知艦にして其速力一時間十九哩なるも重慶號はわづかに十二三哩に過ぎざる也故に其危きこと云はんかたなし然るに其時飛鷹は焚料

炭不足して全速力を出し能はず航走することはつか六時間石炭全く盡きければ己むを得せして終に舵を轉せり願れば此時北京城は密電紛馳して鼎の沸くか如く爲めに志士の追捕せらるゝもの三十八人の多に及びり元より國の爲め刑場の露とさもるは惜むに足らぬとも三寸息たもれん万事休す誰か亦輔弼の臣となつて回天の業に任せるものぞ今や彼が身は九鼎太呂よりも重と云ふべし知らせ芝罘に於ける彼が運命は如何

芝罘にては重慶號の碇泊すること一時半なりしも彼は事變を知らざるなり故に船の入港するや彼は直に上陸して諸所を遊覽し五色石若干個を得て悠悠飯船せり先是一時間逮捕の密電天津より到しも芝罘の支那官吏は偶々急用ありて膠州に行かんとす故に倉忙の際之を懷中に收め該地に至つて電文を譯讀すれば何ぞ圖らん重慶號搜索の命令あらんと

け依て大に驚き直に芝罘に取つて返せしも此時船は己に黒煙を吐て沖合遙かに進行しつゝあり幸運乎はた天祐乎此の如くして彼は虎口の難をのがれたりと云へとも願れば前途尙遠し知らせ上海に於ける彼か運命は如何

(六)

上海に於ては道台蔡鈞既に北京政府よりの密電を受領せり渠は親ら小蒸汽船に搭し日々吳松に出張して天津より入り來る船舶を檢査し而る後始て船客の上陸を許可せり當時上海の志士は小舟に搭して窺に吳松に到りしもかゝる嚴重なる有様を見て到底彼を救ふの道なきを思ひ何れも嘆息して止みたりと云ふ道台が日々部下を指揮して彼所に待ちつゝありと知るや知らせや彼を載せたる重慶號は陰曆八月九日午後二時濤を蹴立て吳松の沖合數里の所に來れり嗚呼彼は所詮釜中の魚たり籠

中の鳥たり事茲に到る最早彼か運命も末なりと謂ふべし凡る人の危険は其身の危機に立つを自覺せざるより甚しきはなし彼は今事變を知らず故に其身の危険に立つを想はざる也屈指すれば萍離蓬斷闕を辭してこゝに五日也大海濤はなつて半宵幾度か夢と破りしも汽笛一聲首を下ぐれば身はいつしか江蘇省の海岸にあり見渡せむ漫々たる楊子江の上流蘆荻風に戦ひで千頃の泥沙渺茫たり時しも海氣爽かなる所彼は甲板に立て客と頻に談笑しつゝありしが然るに怪しむべし忽ち一英人の小蒸汽船に搭じて到るあり窃に彼の寫眞を手にし幾多の船客中より彼を見認めて曰く君は是れ廉氏乎と、訝かりて共に室に降れば英人先づ問ふて曰く君は北京にありて曾て人を殺せしか曰く異なる哉我何すれや人を殺さんや然らば君か出京の理由は如何曰く我は大清國皇帝陛下の密旨を奉じて出京したり密旨果して如何願くは聞くを得ん乎於是彼直

に筆を取りて其大要と書しければ英人亦懷中より一紙を出す是乃北京政府が上海道台に與へし密電也曰く皇帝既に康有爲の爲めに弑せらる因て即時其地に於て逮捕とべし云々彼之を見て撫然たるもの稍々久し英人曰く我は英國上海領事の派遣する所也君我に隨て來らん乎と乃ち手を携へて共に小蒸汽船に降り英の軍艦に移れば此時遅し道台の小蒸汽船亦重慶號に到りしも終に全く及ぶ能はざりき彼元より英の公使及英の領事を職らす故に其救ふところとなるや獨り清國官吏のみならず彼に於ても亦大に意外とせし所也ろも英國上海領事が如何にして彼の寫眞を得しかと云ふに初め北京政府の密電上海に達せらるや道台直に之を翻譯して彼の寫眞と共に各國領事に照會し共に俱に其逮捕と請へると以て也英人元より彼が革新派の首領として深く帝の負托するところあるを知る故に道台に先ヒ特に彼を救ひし也此の如く彼は領事の救護

に依り辛ふじて九死に一生を得たりと云へるも哀むべし此時北京政府の密電は更に皇帝の崩御と報せり依て彼は皇上已に西后及逆臣等の弑する所たるを思ひ目張り眉軒り痛憤胸に迫りて涙忽ち兩眼に溢る時に一詩あり

忽○灑○龍○騰○翳○大○陰
紫○微○移○座○帝○星○沈
孤○臣○辜○負○傳○衣○帶
碧○海○波○濤○夜○夜○心

以て當時の彼が無念察すべきに非らざや於是乎渠は家人及弟子等に與ふる遺書數通を作り心大に決する所ありしも皇帝の崩御未だ必ずべからせ今しばらく身と全ふし今后の形勢を視るに如かず生は難く死は易しとの英國領事が切なる勸告に依り始めて其自及と思止まれりと云ふ嗚呼事を誓ひし至尊の詁を得一死地下に見んとするは寧ろ臣子の至情也君臣の高義也此精神ありて始めて天下の大事に任せべく此決心あり

て始めて經國の任に當るべし何者の無腸漢が動もすれを彼を見て輕罵也無謀也となす彼等寧ろ愧死すべきに非らずや

(七)

夫れ常理と以て之を論せん乎彼は萬々生理なき也果して然らば彼の捕へられんとして捕へられず死せんとして死せざるは蓋し天意あるに依る乎非乎第一皇帝陛下が兩度迄詔と下し彼の上海行と促すに非らざらん彼は北京を出て走して必ぞ死せむ第二政變にして今日早く乃ち五日に爆發したらんには彼は其途中に在つて必ず死せむ第三若し又一日遅く北京を出發すれば彼は寓舎に捕はれて必ぞ死せむ第四若し又天津にありて一泊せん乎彼は乗船する能は走して必ず死せむ第五六日重慶號の拔錨するに非らざらん彼は塘沽にありて必ぞ死せむ第六招商局の汽船より英船に轉乘するに非らずんば英人救ふ能はずして彼は必ぞ

死せむ第七飛鷹にして石炭の欠乏するに非らざるを忽ち其追及する所となつて彼は必死せむ第八芝罘の官吏膠州に行くに非らずんば彼は彼所に捕縛せられて必ず死せむ第九上海にて英國小蒸汽船の救ひに遇はざらんば彼は道台の手に縛られて必死せむ第十上海道台にして各國領事の協拿と請はざらんば英國領事之れを知らざれば救ふ由なくして彼は必死せむ此時に當てや智者も謀を施す所なく人事俱に窮せりと云ふべし。たゞひ其一を救ふも其他を救ふ能はずんば彼又た必死せむ此十必死あつて而して彼竟に死せざる蓋し冥々の中鬼神ありて之を阿護するあらんとは目下清國の志士等が筆に口に専ら唱導する所也。

當時彼の上海に在て難を免るゝや大隈外務大臣野公使等は直に馳電して其無事を祝せりと云ふ此間の消息得て傳ふべきもの少からずと云へど

も事國際上の交誼に關す未だ容易に語るべからざる也兎に角彼は是よりして難を香港に避け終に昨年九月十二日河内丸に搭じて帝都に來り偕ては今回の外遊に及べる也當時彼れ一詩あり

海○水○排○山○通○日○本○。天○風○引○月○照○琉○球○。

獨○運○南○溟○指○白○日○。龍○窟○吹○浪○渡○滄○川○。

聞く彼れに二人の令嬢あり長は芳紀まさに十有九風姿清婉操節凜として是れ亦一個の女丈夫也夙に婦人矯風會の會頭たる而已ならず先に彼が天覽に供へし日本維新の政變史二十卷は嬢の推覈與かつて大に力ありと云ふ以て彼が家庭の一斑を知るに足るべし昔者「シセロ」「シイザ」を許して曰く彼若し志を得れば羅馬の民は奴隸たらざるを得んと吾人は云はんとす彼にして刺客の手に斃れずんば他日捲土重來風雲の寵兒となつて清國維新の大業を成就せんと蓋し今帝の絶倫に彼の果斷

を以てすれを恰も龍に翼を添へたるが如く改革の業は手に唾して容易に成るべければ也是れ吾人が未來に對する占定也豫言也願くは如上の言をして妄誕不稽に葬らしむる勿れ友邦の爲め名士の爲め切に其否らさらんを祈る也請ふ以下少しく話頭を轉じ更に進んで今后彼が自國に對する抱負の一部を述べん

るも清國如今の大患が老臣の頑冥よりも寧西后の訓政にあるは何人も共に知る所也傳へ曰ふ東太后同治帝后を殺せしも亦た肅順端華の二王を殺せしも彼女也と吾人果して其然るや否は之を知らせと云へども兎に角從來既に醜聲の屢々外に洩れしより視れば彼女が放縱多淫にして操行の修らざるは殆んど疑ふべからざるが如し現に去秋藤侯謁見の時も頻りに紅粉を施し海面笑を含で秋波を送れりと云ふ落花情あり流水豈意なけむ知らせ東洋の大英雄好色侯は六十七多情の此若婆に對し果

して慇懃を表せしや否や實に近來抱腹絶倒の沙汰と云ふべし

畢竟するに咸豐帝崩御の後は其女猶り權を専らにし生殺與奪すべて其欲するが儘なり故に意滿ち心驕り日夜后宫にあつて情海慾波に身心を蕩盡す其人倫正道を失して殘忍狼戾ならずとするも豈に夫れ得べけんや故に政變以后皇上の内侍及び宮女にして彼女の爲めに誅戮せられたるものは其數前后殆んど二十餘人に及べり以て其陰險慘酷なるを知るに足るへき乎且今や皇帝は瀛臺に幽せられ慨傷抑鬱起居飲食殆んど自由なる能はせ其命寔に風前の孤燈に似たりとは何等悲惨のこと乎吁金と愛するを知れども國を愛するを知らず個人的觀念のりて國家的理想なきは支那人の特習也且つ變革を忌み故常に拘泥するも是れ亦支那人の天性也へに今日忠良黜て姦臣奸を逞ふするの時にあたり國家の憂に先つて獨力革進の業に任せんとす是れ豈に難中の難にあらずや己に

皇室の現状此の如くなるが上卓拔非凡の康有爲氏亦罪を獲て國外にわ
り今后如何にして文明の福音を傳へ如何にして國家の體面を維持せん
ととるや是れ吾人の大に知らんとする所也是に對する彼の負抱果して
如何

(八)

列國の商業的勢力に依り一日も早く今帝の勢力を回復せんとするは彼
か唯一の政策ととる所にして若し萬々己むなくんば西后死去の時と待
たんとは彼か失意的第二の手段とする所也而して其我國に來り更に今
回の外遊に及べるも所詮は此の目的を貫かんとするに外ならざる也不
幸にして第一の政策行はれざるも第二の手段にして之を視るを得ば支
那今日の革新は決して望みなしと云ふべからず語と換ゆれば列強は彼
か請を容るゝに吝なるも若し夫れ西後にして死去せんか世は忽ち今帝

に謳歌せむ乃ち今帝の武英は上下の積弊を打破し併而支那の獨立を維
持とるに足るべけれ也彼は實に如上の決心を以て今后諸州國に遊説
すべしと云へども是れに先じ彼の最も憂ふる所は露國南下の勢力と及
び分割論の實現にありとす憶ふに一國成立の上に於ては今日と云へど
もなほ武力即權力たり而して列國生存の上に於ては優勝劣敗實に其手
段たるなり故に今帝の施設と待たず西后政訓の日に於て早くも内乱及
分割若くは露國の爲め其主權を失ふことなるや否や是れ彼か日夜焦心
苦慮する所也幸にして列國利害の點より分割論の消滅することあらん
も今より三年の内即ち露國鐵道完成の曉は果して如何なる變態になり
行く乎清國の前途は未だ容易に知るべからざる也東清鐵道は既に旅順
大連に南下して右線牛莊に及むんとし蘆漢鐵道(露國の出資する所也)
四百餘里亦北京より漢口に横斷せんとす視來れば支那の現状岌々乎と

して夫れ危哉如斯露國の勢力は己に頗る強大なりと云へども而かも鐵道未完の今日にありては未だ必ずしも絶望落膽するに及ばざる也是れ彼が列強の商業的勢力に依り一日も早く今帝を御代に出さんとす所以にして夫の埃及亡國の歴史の如きは彼の視て以て未だ禍害の少しとなす所也前門虎を拒げと后門狼あり是れ豈清國如今の形勢ならんや鐵道の如き鑛山の如き有利の事業を擧げて悉く外人の手裡に委す國家百年の禍害是れより大なるはなし宜しく地方の豪族をして之に投資せしむべしとは元より刻下の急務たるに相違なきも社稷危急存亡の今日に於て之と言ふ尙ほ死兒の歳を數ふるの愚に如かざる也且夫れ分割論の提出に到りては最も不條理千萬のことと云はざるを待す何となれば若し清國にて到底獨立の見込なく自治の望みなくんばむしる今日分割するの優されるに如かざる也支那帝國亡ぶも中華の民は依然たり人文發

達の上より論ぜれを英の印度に於けるが如く却て文明の恩澤に浴すべし是れ或は不可なからむ然れども苟も否らす人民にして國家組織の能力を有し國政刷新の素養を有するものとするれば寧ろ文明先進國の義務として大に之を扶植せざるべからざるに非らざるや且夫れ獨立國の定義に於て其存立及進歩に關し妄りに他國の容喙を容るは公法上の原則決して許すべからざる事たり然るに列國は何等の理由あつて乎強て之を分割せんとする露國は波蘭を併呑したり然れども今や内に愛國の士起て獨立の旗を翻さんとす其永遠に壓服し得るや否やは目下の疑問也「キユバ」亦た已に西班牙の羈伴を脱し埃及時に英の干涉を否む征服に始まり獨立に終ふるは十九世紀文明の大勢也滔々たる此の大勢に抗し強て分割を試みんとするは是豈血と以て血を洗ふの愚に非らずや況や支那の改革は前途其望あるをや日本政府か内憂外患交々到るの時に於て

能く王政復古の大業に成就したると思ふは誰か清國維新の業成し難きを疑ふものあらんや當時日本の國勢は支那の今日よりも寧甚しきものあり然るに尙能く此大事をなす今若し湖南湖北廣東の三省を以て薩長士に比せべくんを公論正義志士國に斃るゝの狀は恰も日本戊辰の時に似たりと云ふべし攘夷鎖港の反動は却て日本今日の實業を樹てぬ清國上下の保守的氣風は安んず開國維新の原動力たらざるを得んや然りと云へども此の際最も寒心に堪へざるは分割を俟たせ露國を待たず内亂蜂起して國土れのづから潰へんの一也時は失ふべからん機は逸すべからん願くは列國の高義に依り今帝の力を以て幸に清國社稷の滅亡を濟するを得ん乎家を捨て身と忘るゝも想ふ所は國家の安全にあり 至尊の安泰にあり一念茲に到る毎に肉震ひ骨動き五臟六腑殆んど裂くるか如き感ありとは彼の最も熱心に語る所也吾人之を視て亦た大に其然る

五十三

所以を想わざればあらざるも清國か目下一髮千鈞の間に瀕せるは争ふべからざる事實也然れども愛親覺羅氏の宗廟は尙未だ其主權と失ふ迄に到らざる也故に此際我國にして大英斷大決心を持し斷々乎として之に臨まを隣邦の危急を救ふ必ずしも其望みなさに非らざる也今や帝國は海に二十六萬噸陸に十三師團を有す然れども尙は東洋の外交なるものは悉く歐洲に決せらるゝに非らずや是れ獨り我外交の拙なるに非らず其一大原因は帝國の獨力は未だ以て東亞の形勢を維持するに足らざれば也現今既に然り將來亦然らむ是れ我國が利害の上より打算して最も慎重の態度と取らざるべからざる所以也吁唇亡びて齒寒し平和の點より自衛の點よりするも支那を保存して他日攻守同盟の均勢を作るは寧ろ帝國の天職なるに非らずや多年朝鮮に力を尽せしは何か爲めり半島の滅亡は我に禍害を及すも中國の分割は我は何等の痛痒と感せざる

乎。來。ら。ん。と。す。る。問。題。が。人。種。上。の。競。争。に。在。る。と。知。ら。ば。誰。か。支。那。の。獨。立。を。扶。植。せ。る。に。於。て。躊。躇。す。る。も。の。否。南。は。濠。洲。よ。り。北。は。加。奈。陀。に。及。び。借。て。米。國。に。到。る。迄。も。如。今。排。日。運。動。の。激。烈。な。る。は。是。れ。豈。に。其。好。鑑。を。示。す。も。の。に。非。ら。せ。し。て。何。ぞ。や。妄。に。列。強。の。后。へ。に。付。て。一。肉。の。分。與。を。求。め。ん。と。す。る。が。如。き。は。斷。じ。て。帝。國。年。百。の。國。是。と。相。容。れ。さ。る。も。の。也。若。し。夫。れ。列。國。に。し。て。強。て。割。分。併。呑。の。暴。動。に。出。ん。乎。我。宜。し。く。友。邦。善。隣。の。交。誼。に。依。り。將。た。又。た。正。當。防。禦。の。宣。言。に。依。て。大。に。抗。議。を。試。む。べ。き。也。或。一。國。を。敵。と。し。て。干。戈。相。見。も。る。の。決。心。だ。に。あ。ら。ば。支。那。の。獨。立。豈。に。擔。保。せ。ら。れ。さ。る。の。理。あ。ら。ん。や。眠。れ。る。も。の。は。終。に。醒。め。さ。る。を。得。せ。旅。順。大。連。を。失。ふ。も。曉。夢。尙。未。だ。機。也。膠。州。威。海。を。取。ら。れ。始。め。て。鄭。陞。よ。り。起。た。ん。と。す。る。は。支。那。現。時。の。情。勢。也。是。れ。豈。に。扶。く。べ。き。の。時。機。な。ら。せ。や。且。今。や。殘。月。舊。土。を。照。し。て。志。士。の。血。淚。雨。の。如。く。國。辱。千。秋。の。恨。亦。長。へ。に。つ。き。さ。ら。ん。と。す。其。臥。薪。嘗。膽。奮。つ。て。國。難。

に。殉。せ。ん。と。云。ふ。る。は。寧。ろ。至。當。の。事。な。り。と。云。ふ。べ。し。若。夫。れ。妄。に。列。強。の。示。威。に。屈。服。し。其。の。な。す。が。儘。に。放。任。せ。ん。乎。支。那。の。威。亡。は。云。ふ。迄。も。な。く。帝。國。他。日。の。大。患。を。何。奈。せ。む。況。や。歐。洲。一。二。の。強。國。と。界。を。接。せ。る。に。到。ら。ば。前。途。の。禍。害。容。易。な。ら。さ。る。も。の。あ。る。と。や。是。れ。吾。人。か。茲。に。大。聲。疾。呼。し。て。彼。の。說。に。轉。た。全。情。を。表。す。る。所。以。也。

(九)

蓋し我が對清策が内閣の變動と共に從來に一定の方針を存せざるは實に遺憾の極と云ふべし戦后公使を代ふる事已に其幾度なるを知らず然れども一の以て視るべきものなきは豈悲しからせや列國が進んで鹿と中原に争ひつゝある間に我は獨り歩一步后退しつゝあり此の如くんば何れの時を期し支那の獨立を扶植するを得ん視すや奥漢鐵道（廣東より漢口に到る）及津鎮鐵道（天津より鎮江に到る米西戦争の爲め未着）

は米國の爲めに遼州鐵道(北京より山海關を経て牛莊に到る)及び緬甸より雲南に到る鐵道は英國の爲めに膠洲灣より沂洲(江蘇省の境也)に到る鐵道は獨逸の爲めに而して安南より廣西に至る鐵道は佛蘭西の爲めに悉く先鞭を着けられぬ然るに我はの此間にあつて果して幾何の事をかなし得たる始は脱兎の如く後は處女の如く光榮に始りて屈辱に終るは我國既往の外交也人の下風に立ち膝と折て其殘肴を嘗めんとするは目下清國に於ける我が外交なるに非らざるや噫夫れ支那に對する我勢力の微弱なること概ね此の如し豈に慨嘆に堪ゆべけんや故に今の時に當り西后の訓政を解くは則ち清の危急を扶ふ以所にして康氏の説を容るゝは則ち東亞の形勢を維持する以所也

嗚呼彼を助くるは則ち我を扶くる以所にして現時の國勢既に之を證す況や他日を知らざる當局者以て如何となす

彼は此の如くして來り此の如くして去れり其慘憺たる苦心は我の諒する所となりしや否や吾人は今之を明言する能はざるも兎に角彼か帝土を離れざる限りは只さへ拙なる我對清の外交上に一大不利益と來さんどせしや決して争ふべからざる也るも彼か東京に在りしは僅かに半歳に滿たざるも此の間種々の風説は北京に訛傳して西后一派の猪忌を招きたる一にして足らざる曰く彼は今日本の皇居にあり曰く彼は品川子爵等と往復して日夜陰謀を企てつゝあり曰く近衛大隈の侯伯は彼を横濱に出迎へたり云々勿論此の如きは荒唐無稽の言にして毫も取るに足らざるべきも元來我國の事情に迂遠なる彼輩にありてしかく妄信するは強ち無理ならぬ事と云ふべし故に今回彼の漫遊か他動的なる乎自動的なるかは今更説明の限りに非らざるべし何は兎もあれ吾人は彼が今回の漫遊に依りて弘く海外の文物制度と視察すると共に其思想上に亦一

大變化を來さん事を想はずんば非らざる也彼れは理想家なり實踐家也故に其物質的文明の壯觀に眩目して本末を誤るか如きことは萬々之れ無かるべきも或は恐る彼か思想上の變化は他日一躍して歐化主義となるなきや否やを今若し文明の程度よりすれば日本支那の現状は其物質的たるも精神的なるを問はせ歐洲に比して遠く及ばざるは何人も共に知る所也故に以上の點より觀察して彼か思想の激變を危むは必ずしも吾人一己の臆測にもあらざるべき乎遮莫彼は今日夜故國の安危を夢みつゝ遠く天涯の孤客となつて諸外國に遊ばんとす其如何にして革新の方法を取るかは彼か志を得たる他日の問題にして眼前焦眉の目的は一刻も早く西后の訓政を廢くに在り今にして之を云ふは聊か杞人の憂に近かるべき乎

(十)

願みれた汽笛一聲横濱をあとにして已に十有余日なり今や越山吳水漠々として北太平洋の波濤森漫たり一夜風靜波平かなるの夕獨り船窓にあつて往事を追懷すれば戊戌政變の光景歷然として今尙眼前にあり更に冥思默想すれば或は獄裡の鬼となり或は鐵窓の露と消へ残る同志の輩多くは罪を獲て東西に落魄す淚枕頭に濺いで人生の果敢なきを歎ぜるも亦不得己也去れど身は已に君國の大事に任じ一死誓つて社稷の難を梟首烙殺固より其辭とる所に非らざる也況んや同志の非命をや一族の離散をや是れ彼が今日と云へども泰然自若してなほ平常に異ならざる所以也然れども談一たび皇帝の事に及べば哀恨傷惋淚胸に溢れて又た云ふに忍びざるの狀あり且つ彼は出發の前後來訪者の爲め終宵不眠の故を以て大に腦を傷め船体の動搖と共に其病勢を増さんとす依て爾

來は成る可く政談を避け専ら醫士壇島氏の治療を受けぬ其福澤翁儒教の攻撃に對しては氏が孔子三段の教を解得せざるを惜み又た其詩は副島伯を推して第一となし或は男女同權論の如き或は體育智教の如き或は勝伯の晚節に對する評論の如き或は板垣大隈兩伯の人物論の如き或は唐宋時代遺物論の如き或は航業上の問答の如き議論正確考證精博吾人を益するもの甚だ少からざるも事頗る冗長に渉るを以て總べて之を抄略し借も航海意外に拂取りて吾人は最早彼と訣るゝの時機に臨めり依て后日の爲め一詩の揮毫を請へは直に筆を取て左の如く書き下せり

但し一は維新回顧の舊作にして他は船中の新作なり
 歷々維新夢 分明百日中 莊嚴對宣室
 哀痛起桐宮 禍水滔中夏 堯臺悼聖躬
 小臣東海淚 望帝杜鵑江

老龍嘘氣破滄溟 兩戒長風萬里程
 巨浪掀天不知遠 但看海月夜中生

己亥二月渡太平洋由日本和泉丸航海事務長

坂本君懇勲寫呈 康有爲

其筆力雄健にして運筆の自在なるは恰も龍躍虎奮の慨あり

かくて船の愈「ヅキトリヤ」に入港するや彼は一先づ茲地にて上陸することとなれり別に臨み吾人は彼が身の上に對し轉た無限の憾慨を禁むる能はざりき嗚呼夕照を望て哀れを催すは行人の情也況て吾人は血あり涙ある彼康氏に對するをや聞く彼は此地に於て非常の歡迎を受け在留支那人の彼に對する尊敬心は殆んど豫想の外に在り就中同市屈指の勢力家李夢九の如きは日夜非常に奔走し滯留僅か數日なりしにも拘はらば彼が爲めに一千圓を擲て其食膳を供せりと云ふが如き以て其一

班と知るに足るべし其後彼は中華會館に演說會を開き政變の始末より現時の政況に到る迄最も慷慨悲壯の句調を以て痛論し大に彼等の同情を博せりと云ふ嗚呼彼は今や海外に來りて早く己を知るの友に會せり是れ豈に獨り彼の爲めのみならんや如斯して彼は此の地に留ること五日即ち晚香坡に向て出發す

(十一)

晚香坡に於ても彼は亦た非常の全情を以て迎へられぬ蓋し此の地在住の支那人は其數二千人以上に達し實に市内の一勢力たる也故に彼が市廳の議事堂に演說するや滿場立錫の余地なく會するもの殆んど一千人以上に及べり中に七名の支那婦人を見たるは實に前代未聞の事なりと云ふべし蓋し清國に在て婦人の政談演說を聽くは此回を以て嚆矢となす可けれど也夫れより彼は演壇に立て支那現時の國勢が危機一髪の間

にあることより皇帝の幽廢西后の廢扈に到る迄滔々數時間或は慨さ或は怒り最後に日本維新の例を引きて支那の改革一日も忽にすべからざる所以を述べ論旨公明正大彌々説て彌々適切益々論して益々痛快也如斯彼は述べ去り述べ來りて慷慨悲憤の情面に表る此の時滿場水を打たるが如く聽者亦感極まつて一人の能く仰ぎ見るものなかりしと云ふ聞く先是彼は我帝國領事館にありしが熟ら想ふに日本の斯く迄進歩しつゝあるに引きかへて我れは一人の官吏なく是等多くの支那人を保護する能はざるは恰も父母なき孤兒の如しと覺へる感極つて領事清水君の前に泣けりと云ふ勿論右は一小事に過ぎざるも眞實民を想ふ彼が面目は寧ろ此一小事に依りて知るべきに非らずや而して又た彼が晚香坡に渡るの翌日忽ち一個の電信は「シヤトル」より來れり曰く刺客「ジョン、ウオソン」なる者康有爲暗殺の爲め晚香坡に向ふと於是乎有志彼の爲め大

に愛ひしが忽ち龍動の「ベースフォード」卿より電報ありて彼は今後加
奈陀政廳の保護を受くることとなりぬ是より彼不日して「モントリオ
ル」に出で上海以來の干係最も深き英國に向はんとする也吁天涯万里
相違ふて全胞の信義を視千里客となりて愛國の至情生す宜也在外の支
那人が彼の爲めに熱き同情を寄せつゝあると吾人は此の現象を視て獨
り彼のみならず支那の爲めにも又幸運を祝するもの也東西千里今や天
寒く風冷やか也願くは國家の爲めに切に自重自愛おれ吾人今擲筆せん
とするに臨み彼が中西氏を送りて伊藤侯副島伯以下の諸名士に示さん
とする詩二首を請ひ殊に茲に掲げて以て此の稿を終らんとす是れ彼が
頃日の消息と知るに足る可ければ也

上巳後四日與東洲兄遊晚香坡園泊觀櫻花思東國舊

遊並送並洲兄還國偏示東國故人正櫻花大放時也

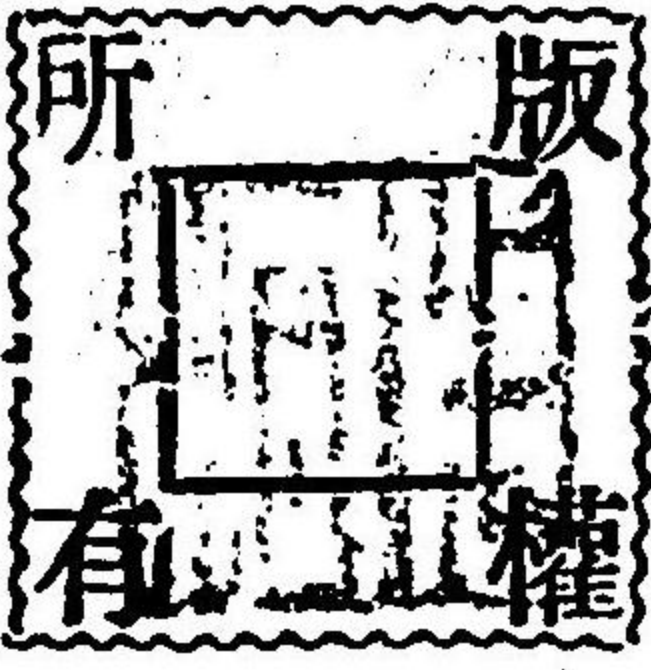
大瀛万里隔遊塵 上野櫻花照暮春
未敢回頭思漢月 得歸江戶是鄉親

東洲兄還國再賦一章亦足知遊者之情也

櫻花開罷我來時 我正去時花滿枝
半歲看花住三島 盈々春色最相想

康有爲氏(完)

明治三十二年十一月廿八日印刷
明治三十二年十二月十日發行



編輯兼
發行人
高知市種崎町九十八番地
片桐猪三郎

印刷人
高知市本町二百番地
片桐仲雄

發兌元
高知市種崎町
開成舍出版局

發賣元

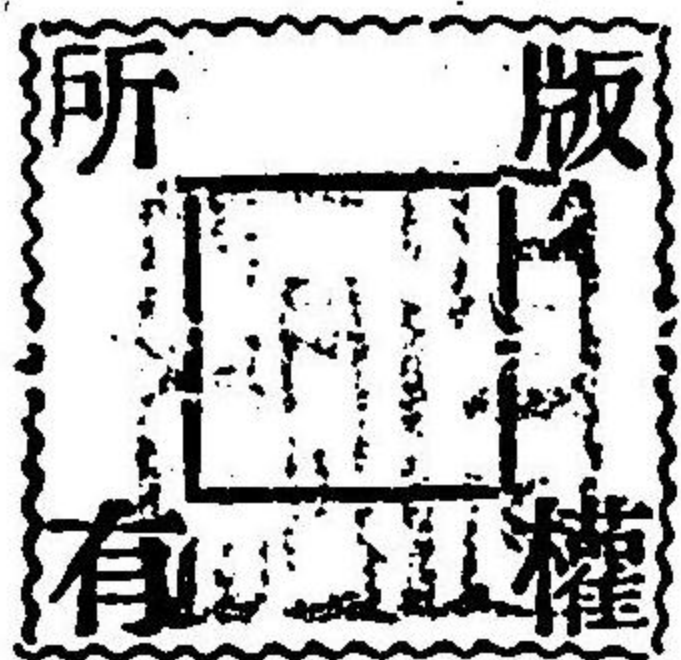
東京神田表神保町
東京神田雉子町

東
岡
武
吉
田
交
崎
盛
京
屋
堂
舍
店
館

關西發賣元

大阪市南久太郎町
大阪市東區備後町
高知市種崎町
全木町下丁支店

明治三十二年十一月廿八日印刷
明治三十二年十二月十日發行



編輯兼
發行人

高知市種崎町九十八番地

片桐猪三郎

印刷人

高知市本町二百番地

片桐仲雄

發兌元

高知市種崎町

開成舍出版局

發賣元

東京神田表神保町
東京神田雉子町

東岡

田

京崎

盛

堂屋館舍

關西發賣元

大阪市南久太郎町
大阪市東區備後町
高知市種崎町
全本町下丁支店

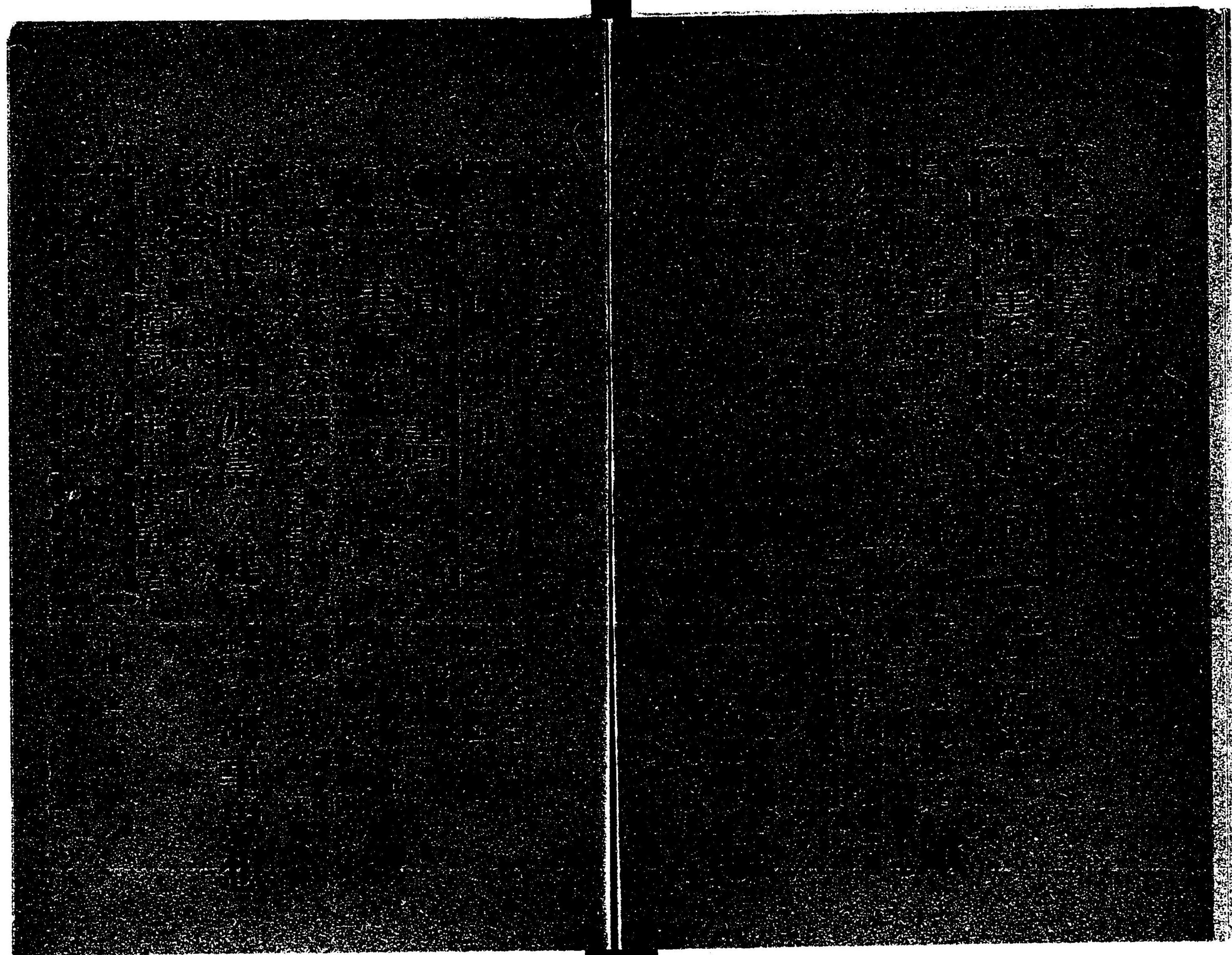
武吉開

岡

交

書

舍店館舍



天也
功也
武也
功也

上落
大定
日

武
功

武
功

武
功

武
功

武
功

武
功

武
功

武
功

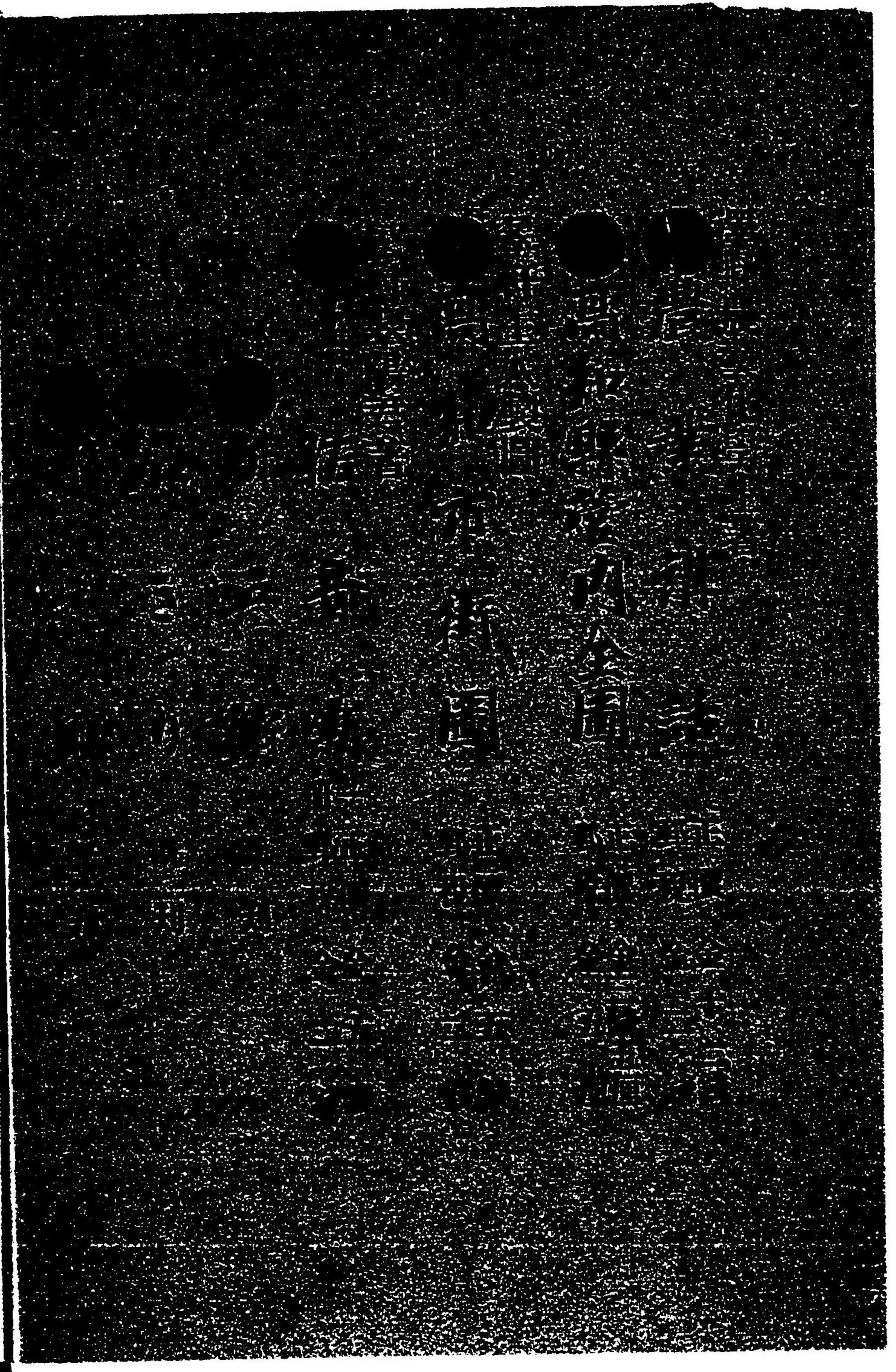
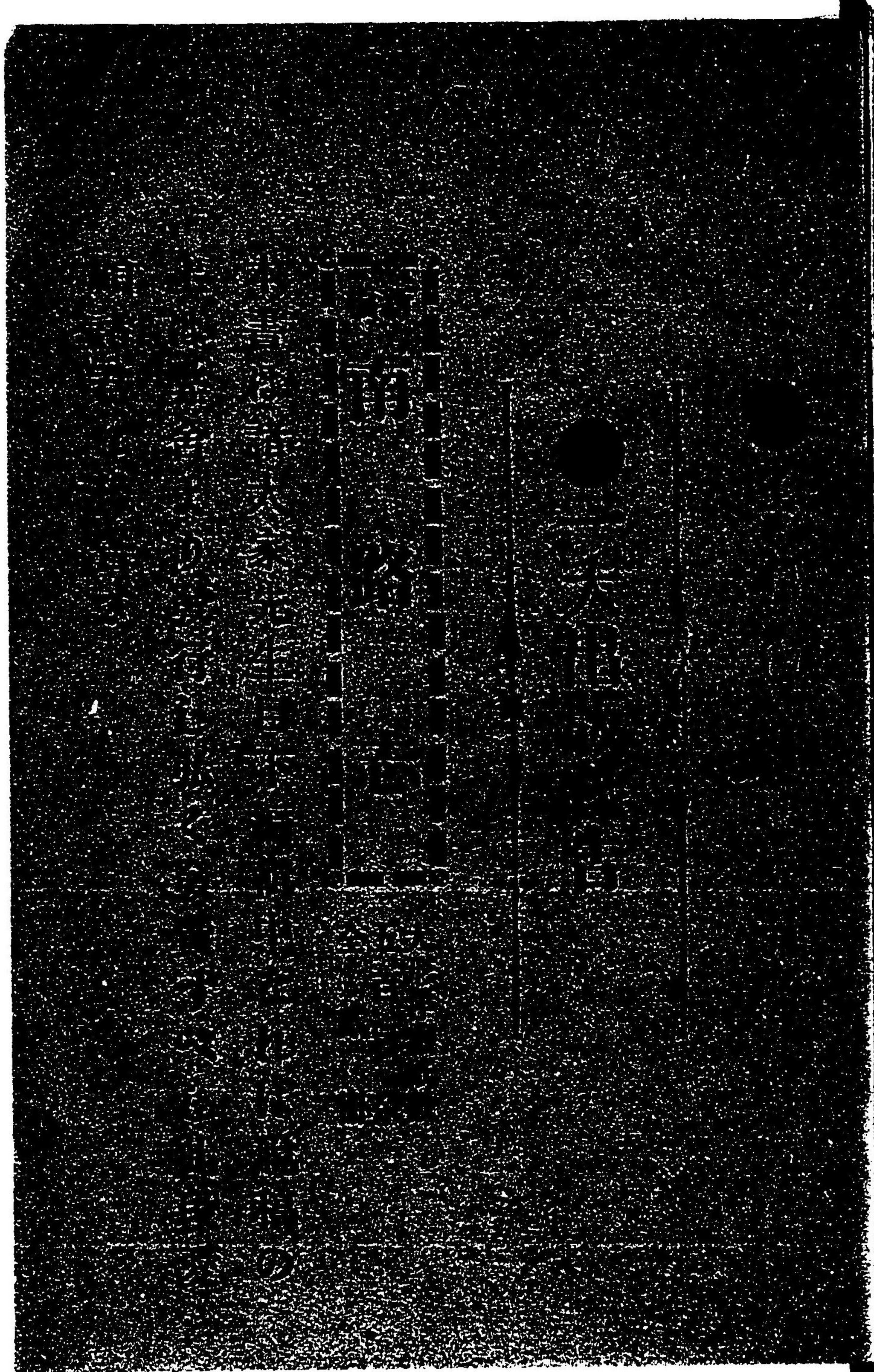
武
功

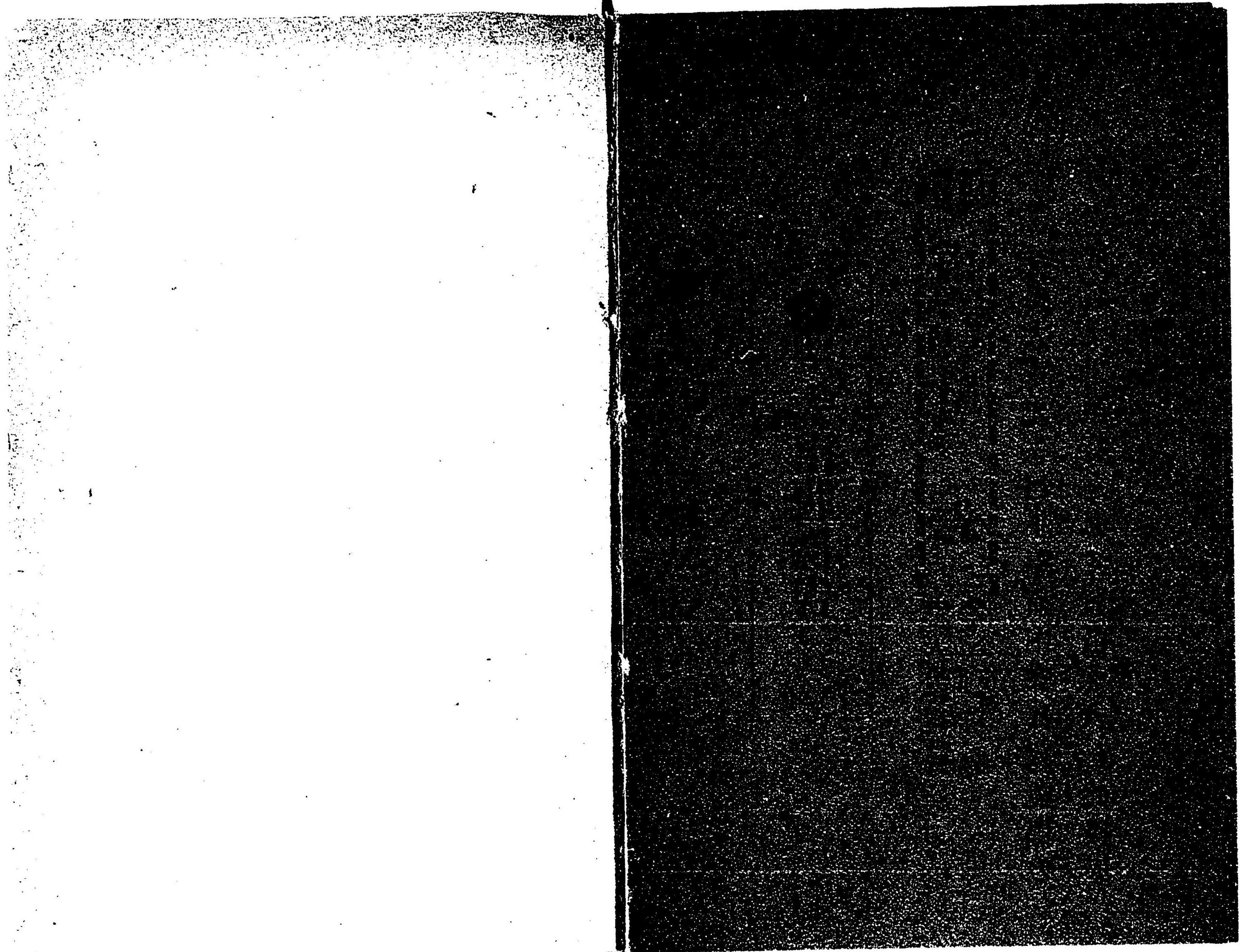
武
功

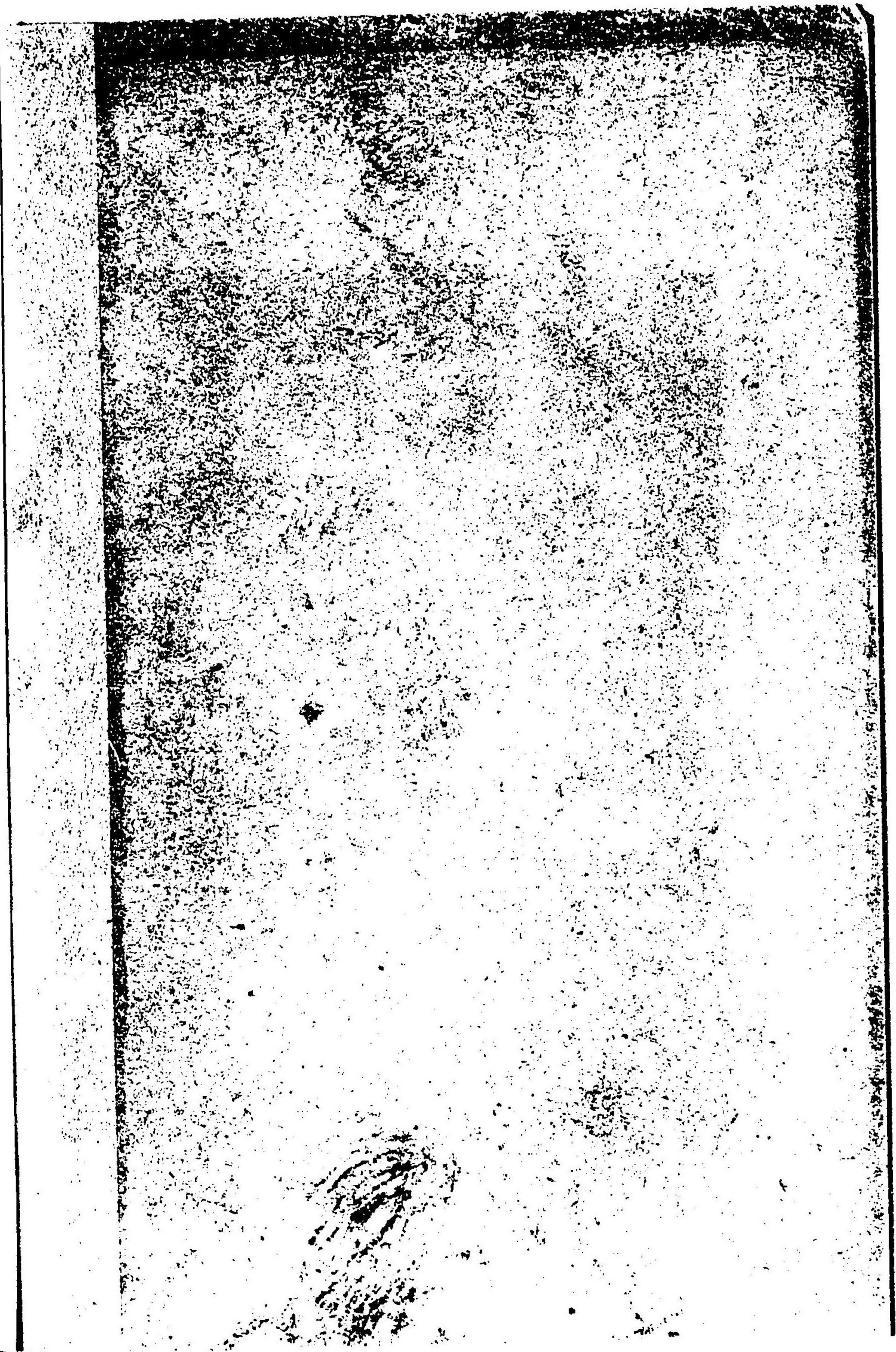
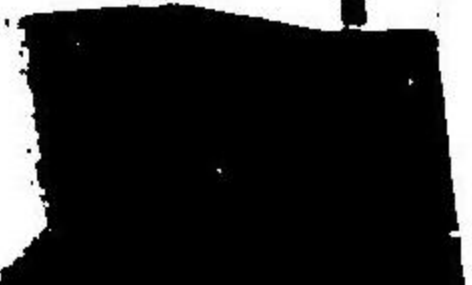
武
功

武
功

武
功







[Redacted]

特61

51

康有為氏

国立国会図書館

007562-000-5

特61-51

康有為氏

坂本 喜久吉/著

M32

ACL-0015

